

ディスカッション成果 平成28年度 ラオス派遣

1. ディスカッションの概要

日付	9月22日～23日		
場所	ビエンチャン ラオス日本人材開発センター、ラオス国立大学		
プログラム名	Japan-Laos Youth Leaders Forum		
テーマ	青年の社会貢献		
参加者	日本青年14名、外国青年20名		
関係者	Ms. Somchay Phetlamphanh, Deputy Director, National University of Laos Ms. Malayphone Sonephachanh, Acting Deputy Chief, Exchange Activity and library division Mr. Viemgphone Soukhavong, Ph.D of Sign Advertisement & Public Park management Dr. Bounheng Southichak, Managing Director, Environmental Specialist		
スケジュール	9月22日	9:00- 9:30	開会式
		9:30-11:45	アイスブレイキング及びゲーム
		12:00-13:30	昼食
		13:30-16:10	基調講演
		16:30-17:30	ディスカッション
		17:30-18:30	夕食
		19:00-20:15	文化交流
	9月23日	9:00-11:00	ディスカッション、大学内でのインタビュー
		11:00-12:15	もちつき
		12:30-13:30	昼食
		13:30-16:00	ディスカッション
		16:00-17:30	発表
		17:30-18:00	閉会式

成果

ラオス国立大学内のラオス日本人材開発センターにて、2日間にわたる日本ラオスユースリーダーズフォーラムが行われた。開会式後、自己紹介を兼ねたアイスブレイキングが行われ、ローカルユースと日本青年の仲を深める初めの一步となった。大学内の食堂でラオス青年との昼食を済ませた後、情報文化観光省のViemgphone Soukhavong氏から「ラオスの伝統的文化遺産の保護と促進」、天然資源・環境省のSoukvilay Vilavong氏から「ラオスの環境」の二つの基調講演を聞いた。その後、全体で四つのグループに分かれて、環境（2グループ）、文化（2グループ）のテーマ別ディスカッションを行った。まず、ラオスの環境・文化について生の情報を得るため、大学内の学生にインタビューし、ラオスの環境・文化面の課題を明確にした。その後、課題解決に向けて持続可能なアクションプランを立てた。フォーラムに参加していたラオス青年はとてつもないレベルの英語力を持ち、知識量も豊富な高校生もいて、青年たちはレベルの高い教育を受けていると感じた。日本青年は、前日にホテルでグループごとにディスカッションの打ち合わせをしたこともあり、皆が同じ意識をもってディスカッションに臨むことができた。様々なバックグラウンドを持つ青年同士のディスカッションであったので、話し合いがなかなか進展しないグループもあったが、ディスカッションを通じて、成果発表後にはラオス青年との距離もより親密なものとなっていた。

環境のグループでは、インタビューによって地方などで工場が排出する汚染物質がもたらす公害問題やダム開発による環境破壊があること、これらの問題自体をよく理解していない人々が多くいることが明確となった。問題意識向上と問題解決に向けてディスカッションした。日本で起きた公害や福島原発事故での教訓をもとに、とても現実的かつ合理的なアクションプランを考えることができた。ディスカッションに臨んだラオス青年の多くは、日本の公害問題や福島原発事故の名前は知っていたが、その原因や概要についてよく知らなかった。開発の裏には犠牲を伴う、という事実を日本で起こった事故と絡めながら伝えることができた。

文化のグループでは、伝統文化の衰退を主なテーマとしてディスカッションを行った。現在でも正式な場や学校の制服として着用されるラオスの伝統衣装「シン」を例に、伝統文化は継承されているが現代に合わせて形を変えているということに認識した。一方、衰退しつつある伝統文化もあることを学び、それらを継承するためのアクションプランを考え、全体で発表した。

22日の夜には文化交流を行った。ラオス青年は民族衣装に身を包んでラオスの伝統的な歌や踊りを披露し、日本青年は自主研修期間等で練習した「ソーラン節」、「恋するフォーチュンクッキー」を披露し、kiroroの「Best Friend」とラオスの代表的な歌である「チャンパーの花」を歌った。

今回のフォーラムはディスカッションや文化交流を通して、それぞれの国の抱える問題点や魅力を紹介しあう良い機会となった。ここで得たつながりを一生大切にしていきたい。

2. 分科会（文化）の概要

テーマ	文化
参加者	日本青年8名、外国青年10名
トピック	日本政府が10万ドルを援助すると仮定して、ラオス文化をラオスの若者と外国人に広め保護するために、アクションプランを考える
成果	伝統文化の在り方や継承の仕方について互いに考えを深め合い、具体的で継続可能なアクションプランを考案できた。

1. ラオスでの現状

- ・ 衣装や食事など多くの独自文化がある。
- ・ 女性の伝統衣装シンは正式な場での服装や学校の制服として定められている。
- ・ 昔の遊びやラオスの楽器・歌など、いくつかのラオス文化は消えつつある。
- ・ 学校には音楽の授業が存在せず、伝統音楽の伝承が難しい状態である。
- ・ ラオス文化はタイ文化と似ている部分もある。
- ・ アクションを起こすには、政府の許可が必要である。

2. 日本での現状

- ・ 日本にも独自の文化があるが、特に日常的生活からは消えつつある。
- ・ 若者は伝統文化に興味を持たず、文化伝承者の高齢化が進んでいる。
- ・ 国費による文化伝承者養成も行われている。
- ・ 日本の一部の学校では、琴や三線などの伝統楽器を習う。
- ・ 文化のデジタルアーカイブ化も進んでいる。

3. 伝統文化の維持方法についての意見交換

- ・ 博物館や図書館で社会教育を行う。
- ・ 学校教育のカリキュラムに取り入れる。
- ・ 両親からの伝承など、家庭教育を促進する。
- ・ 青年の文化交流プログラムを行う。
- ・ SNSや映画、漫画などの現代的なメディアを通して文化の伝承や記録を行う。
- ・ 観光の一部に取り入れ、伝統文化の継承に観光客の力を活用する。

4. 発表の内容

二つのグループに分かれて、アクションプランを考え、発表した。

① Cultural Festivalの企画

- ・ ラオスの首都中心部で、ラオス人と外国人を対象としたCultural Festivalを企画する。
- ・ 昔遊び、音楽、衣装、食事等のブースを作って文化体験や鑑賞を可能にする。
- ・ 固有の文化を多く持つ地方の人々の製品を販売する店舗を設け、利益を彼らに還元する。
- ・ 運営のためにボランティアを募集し、青年の貢献も促進する。

② 伝統音楽教育プログラムの作成

- ・ 専門家に教科書を執筆してもらう。
- ・ 伝統的な楽器を購入し、教育プログラムを作る。
- ・ 音大を志望する生徒に奨学金を与える。
- ・ 奨学金をもらった生徒から伝統音楽を広めるボランティアを養成し、コンサート等を開いてもらう。
- ・ 教育省と連携する。

分科会(文化)の感想

北 島 らら

日本語でもディスカッションの経験は数えるほどしかない。英語で自分の意見を言うのが得意ではない。そのため今回のラオス青年とのディスカッションプログラムが始まる前は、正直楽しみという感情よりも緊張や不安のほうが大きかった。しかし、アイスブレイキングの時間に、言葉だけが自分の気持ちを伝える手段ではないということファシリテーターの方がゲームを通して教えてくださったため、何でもいいから意思疎通しようと思った。グループが決まり、いよいよディスカッションが始まった。まずディスカッション中のルールを決めることから始まったのだが、ラオス青年から真っ先に出た言葉は「相手へのリスペクトを忘れない」という意見だった。最初に「思いやりの気持ち」という意見が出てくるあたりに、はやくもラオスらしさを感じた。私は文化グループに所属していたのだが、本題では決められた予算と期間内でできるラオス文化の維持と存続とは何かについて話し合った。ラオスの特徴の一つに49の民族が今なお共存している多民族国家という点があがる。それぞれの民族が伝統技術や民族衣装・食文化を持ち合わせているため、それらを体験できるお祭りを開催しようという意見にまとまった。ここまでは順調に進んだが、祭りまでの6か月間の工程を組む作業が難しかった。ラオス

では祭りなどの行事を開催したい時、まず政府に書類を提出し承認を得なければならないそうだ。どのような趣旨で何を目的に行われるかの厳しい検閲が入るらしく、滞在中あまり感じることもなかった社会主義国ラオスの側面を知った。もう一つ興味深かったのが、各民族に何かを依頼したい時、はじめに部族の長に挨拶をしに行くという決まりがあることだ。49もの部族があるにもかかわらず争いが起こらない国であるのは、このように厳格な礼儀作法を踏まえ、互いを尊敬し合う慣習が残っているからだと思った。

発話が活発になり熱が入った議論の中では、意見の食い違いが起きたり、言葉の捉え方がラオス青年と日本青年の間で異なったりして、しばしば議論が停滞した。そういう時、いかに相手の言いたいことを言葉以外でくみ取れるかということ学ぶ機会にもなった。

ディスカッションをする際の技術に対する課題は残ったが、考え方の違いを発見し、ラオスという国の理解を深めるための有意義な経験をすることができ、何よりディスカッションを楽しむことができた。



3. 分科会（環境）の概要

テーマ	環境
参加者	日本青年6名、外国青年10名
トピック	日本政府が10万ドルを援助すると仮定して、都市に住む青年に対して環境の知識と環境保護に対する意識を促進させるプロジェクトを作成する
成 果	
<p>1. ラオスでの現状</p> <ul style="list-style-type: none"> ・森林保護に対する意識が高い。 ・リサイクルの意識が低い。 ・都市ではごみ問題、水質汚染問題が発生している。 ・高校で初めて環境に対する基礎教育が行われるため、環境に対する教育が進んでいない。特に地方において教育レベルが低い。 ・学生へのインタビューでは都市のごみ問題、大気汚染に加えて都市の人口密度が高いという意見も多かった。 <p>2. 日本での現状</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界遺産登録の影響で富士山、屋久島においてごみ問題が発生している。 ・日本の4大公害において、現在も被害が続いている。 ・水力発電のための大規模ダムは、近年環境破壊を深刻にするため敬遠されている。 ・経済成長が環境を破壊することもある一方、先進技術の発展により省エネ商品など環境負荷を軽減する商品も開発できる。 ・原子力発電所の事故について、情報が限られており、汚染水についても現状対処できていない。 <p>3. 発表準備中における意見交換の内容</p> <p>ラオス側の意見</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どの地域の環境問題にも対応できるよう、各地から代表を選ぶ形が良い。 ・政府からの許可が必要、政府に宣伝をお願いするのが良い。 ・予算はできるだけ少額に設定した方が、政府の許可が下りやすい。 ・教育プロジェクトを修了後、何らかの証明書か賞が必要。 ・地方に戻って活動してもらうには、何らかのインセンティブや監視体制が必要。 <p>日本側の意見</p> <ul style="list-style-type: none"> ・派遣だけでなく、事前勉強としての講義が必要。 ・環境に関する講義には、ラオスと日本の両方の講師を招く。 ・講義については、対象者だけでなく興味を持った人なら誰でも参加できるようにした方が良い。 <p>4. 発表の内容</p> <p>①18YLP (18 Youth Leaders' Projects) : ラオス代表者を日本に派遣し、環境問題について学んだ後、ラオスの各地方の状況を把握し、地域にあったプロジェクトを計画・実施する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・環境に対する講義：日本人講師2名、ラオス人講師2名を招へい 毎週土日のどちらか1日4時間、計16時間行う 派遣希望でなくても、興味を持っていれば誰でも参加可能 ・選考：派遣希望者各県2名、合計36名を選ぶ フローは、1) 講義に基づくテスト、2) 小論文、3) 面接 ・日本訪問：1か月間、日本の環境問題に関連した地域・施設を訪問 ・帰国後：出身県の地方政府、NGO、NPOを訪問する 地元の問題の把握、プロジェクト立案のヒントにする ・プロジェクトの企画立案：地元住民と共に行う その際政府の許可を得、広告などバックアップしてもらう 国内外問わず広く広告を行うことにより、今後の資金援助を期待 	

成果

- ・振り返り：プロジェクト実施、結果を評価し改善点など見直し
より良いプロジェクトを提案し、同様のプログラムを持続的に行えるよう資金確保
- ②LYELP (Lao Youth Environmental Leadership Program)：環境に対する知識、興味を持つ人材の育成プログラム
 - ・各県から5名の高校生を招集
 - ・一か月間のプログラムを実施
 - 1) マネジメントプログラム
 - 2) 環境プログラム
 - 3) リーダーシッププログラムそれぞれのプログラムにおいて、国内外から招へいた大学教授による講義、現地視察
 - ・地元に戻り、地域住民に対する環境意識向上
 - 1) 各県において、環境意識向上におけるプロジェクト企画立案
 - 2) 参加者同士でオンラインミーティング、現地訪問

